

子どもの心に添いながら

女子短期大学部 石川 洋子



1990年に文教大学女子短期大学部に赴任しました。保育学、人間発達学、子ども文化演習など、子どものことに関する授業などを担当しています。赴任以前にも、短期大学の幼児教育科にいましたので、20年ほど、小さい子どもたちと親、そして、幼稚園・保育所の先生たちに関わる仕事をしています。何よりも大事なのは、今、目の前にいる人たちの「声」。それを聞くことから、研究も実践も始まると思っています。(いしかわ・ひろこ)

保育学関連の授業の時には、いつも、学生に、小さい子どもの話をする事の難しさを感じます。その原因の一つに、少子化などで身近に子どもがいなくなったため、子どもを知らない、子どもに触れたことのない学生が多いことがあります。自分の知らない「人間」のことについて学ぶ難しさ、教える難しさを痛感している毎日ですが、でもだからこそ、私自身、学生にそれを伝えるおもしろさも感じるのかもしれない。

1. 子どもの心を理解する

小さい子どものことを知らない学生が、増えている。特に、乳児は、抱いたことも、触れたこともない学生が多い。知らないだけに、子どもに対して拒否感を持つ学生も少なくない。晩婚化や子どもを持ちたくないと思う人々の増加と共通した心理かもしれない。

しかし、乳幼児という「人間」のことについて学ぶ時、それを自分と遠いもの、自分の「枠外」のものとしては、ならない。小さな子どもに対してであっても、自分もその延長線上にいるのだという自覚が、学ぶ姿勢を真摯なものにするし、深く考えることもできるのだと思う。子どもを取り巻く社会事象や問題点を学ぶ時にも同様である。「子どもの問題」とか、「親の問題」という、自分と切り離れた視点で片づけるのではなく、自分自身と直接関わる問題としてとらえることが大切である。

さらに、学ぶ対象に対して、直感や感性で、「わかる」と感じられることは、その対象、つまり、子どもや親への暖かいまなざしにつながる。そしてまた、理屈では割り切れない人間の心や行為、またはその喜びや痛みを推

しはかることにもつながる。これは、生きた学問として、自分たちの人生の中でも応用の効くものとなる。

もちろん、ある事象に対して、自分の直感や感性だけで論を進めることは、学問の姿勢とは言えないだろう。さまざまな社会事象やその立場を知り、それぞれの人々の気持ちを理解し、それを総合的に見つめる姿勢は大切である。しかし、いずれも自分の延長線上にある人間のことだという自覚を忘れないようにしたいと思うのである。

このためにも、子どもの心をどう思い出し、それをどう理解してもらおうかが、授業の一つの鍵となると思っている。

2. 保育学

保育学で学ぶ内容には、子どもの心身の発達、子ども観の変遷や保育の歴史、食事や排泄などの保育方法、子どもと親との関わり方、そして、現在の子どもの取り巻く社会状況や課題などが含まれる。教育学、発達心理学、医学、生物学、社会学、児童福祉などの総合的な視点から、子どもの育ちを援助する方法を探っていこうとするものである。

①人形や視聴覚教材を使って

「太郎」と「花子」という名前の人形がある。首もすわっていない、出生直後の体型を模した人形である。学生には、授業の最初に、この人形を抱いてもらっている。

乳児を抱いたことなどない学生がほとんどであり、おそるおそる抱いているが、まずその重さに驚くようである。人形の重さは、そのまま人間の重さとして、伝わるのかもしれない。小さい子どもを身近に感じる第一歩である。

また、ビデオなどの教材を使うことも、子どもの心を思い出し理解したり、子どもの問題について具体的に考えるためには、やはり有効な手段である。幼稚園や保育所における子どもを見るのも有効であるが、乳児が家庭の中で実際に育てている様子を見ることも、おもしろく感じられるようである。

「見る」ということは、子どもについて、見る側に多くの情報をもたらす。発達、成長の様子が生き生きと理解できるし、子どもの目の動きや表情などから、その心や気持ちも伝わってくる。時間の経過の中での子どもの行動を見ることで、泣いたり笑ったりすることの原因や親や周囲の対応の善し悪しも推測できる。そして何よりも、子どもを自分の感覚の中でとらえることができるメリットがあるろう。

ビデオなどの教材を見せた後、気づいたことを書いてもらっているが、学生が子どもの表情や行動、気持ちを敏感に読んだり、察していることに、驚くことがある。「見る」ということは、何か学生の心に、ストレートに響くものがあるようである。

②事例を多くあげる

現在、子どもや親を取り巻く社会状況には、課題が多い。少子化の問題、子どもの育ち自体の問題、子育て支援など親への対応、保育所に入所できない待機児の多さや虐待の増加など、山積している。ここには、社会的な問題と個人的な原因とが複雑にからんでもいる。これらのことを学び、また研究していくには、

社会的な切り口と共に、人間そのものへの理解が欠かせない。

そのために授業では、プリントなどを使って、事例を多くあげることになっている。「例えば・・・」と、愛情の伝え方やしつけ方などの事例や、虐待などの思いもよらない厳しい事例を聞くことは、子どもを身近に感じたり、人間をさまざまな視点から見つめられるようになるきっかけともなる。以上のように、保育学の授業では、ビデオを使ったり、事例をあげながら、小さい子どものことをより多く、正確に伝える方法を模索している毎日である。



プリントを使って事例紹介

3. 子ども文化演習

①「物」を手がかりに子どもの「心」を理解する

子ども文化演習の授業では、児童文化の話と共に、子どものおもちゃを作っている。紙芝居や絵本、動くおもちゃ、布のおもちゃや布の絵本などを個人、あるいはグループで、自由に制作させている。

絵本などでは、ストーリー自体を考えることから始める学生もいるし、昔話や現代のアニメなど、既成のものをもとに作っていく学生もいる。最近は、ストーリーから考え、絵本などを制作していく学生が少なくなったように感じる。それは、よく言われるように、創造性が少なくなっているからかもしれないし、面倒なことを避けるきらいがあるのかもしれない。手作りのものよりも、既成の物の方が、格好良く仕上がるように思うのかもしれない。しかし子どもは、手作りの良さは、敏感に感じとるものである。

いずれにせよ、学生は、楽し気に「物」を

作っている。あれこれ考えることも楽しい、作るという作業自体が楽しいようである。自分自身の子どもの頃の遊びやおもちゃの話も出てくるし、その時の気持ちや思いも味わい直したりしている。また、布の持つ柔らかい感触も、子どもの心を思い出すきっかけともなるのであろう。「物」を作ることを手がかりとして、子どもの「心」を思い出し、それを理解しようという気持ちになれるように思うのである。



布のおもちゃを作る

これらの作品を、友人たちの前で演じたり、発表したりしている。それぞれの個性が出ておもしろいし、絵本の読み方なども素朴であるだけに、心打たれるような読み方をする学生もいる。

おもちゃなどで、子どもと一緒に遊べるということは、子どもと親しくなり、子どもを理解する一つの方法である。学生が、子どもと親しくなる方法を考え、学ぶことは、極めて大切である。親でさえも、我が子と親しくなる方法は考えなければならない。親しくなれば、子どもの気持ちも理解できるし、それだけ子どもからも信頼される。しつけや教育もそこから出発するであろう。



みんなの前で演じてみる

②子どもたちの生の姿を見る

子どもを知るという点では、やはり、子どもたちの生の姿を見て、触れることで、得るものは大きい。

短期大学部では、幼児教育に関する資格は出していないため、実習などの授業はないが、毎年、この授業の中で、「こどもの城」の保育研究開発部で行われている保育を見学に行っている。ここでは、1歳児から6歳児までの保育が行なわれているが、実際の保育の様子や子どもの動きを知ることができる。

また、子どもに話しかけたり、直接ふれ合ったりすることで、生き生きとした子どもの姿を肌で感じられるし、保育技術を目にして、その大変さ、大切さも感じるようである。親子教室を参観することで、子育て支援などの重要性を実感したり、保育学の授業で出てくる社会問題を保育の現場の先生の口から聞くことで、これを現実の問題としてとらえることもできる。

しかし、多くの学生を度々そうした場所に連れていけないことが悩みである。また、これらの学生の体験のフィードバックをどうするか、考えているところである。

学生が、「物」を作ることを手がかりとして、あるいは視聴覚教材や子どもに接することで、子どもの心を思い出し、またそれを理解し、子どもの心に添いながら行動できるようになればと願っている。



互いの作品を見ながら